

[国 語]

探究的な学びを促し、言葉への自覚を高める詩創作活動の工夫

笹川 礼*

1 主題設定の理由

学習指導要領では国語科の目標を「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次の通り育成すること」と掲げている。その中で、「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」と述べている。一方、現代社会では生成AIによる言葉の表層的な生成が容易になり、中央教育審議会(2024)は「生成AIには扱えない概念としての知識の習得や深い意味理解」の重要性を指摘している。

こうした状況から、生活や体験を自らの言葉で表現し自己理解を深める創作活動は、言語活動の中でも人間固有の営みとして重要性を増している。特に詩創作は、言葉の響きや余白、抽象的概念を用いて思考や感情を重層的に表現する「詩」という言語芸術を通して、表現したい内容に適した言葉を選択し、読み手への効果を考慮し、自己の言語生活を客観視する、より凝縮した機会となる。生徒が詩の魅力を受容し、言葉との関係を深め、価値を見いだす過程が「言葉への自覚」を高めると考える。そこで本研究では、「言葉への自覚」を生徒の具体的な思考・行動として、①目的や意図に応じた言葉の選択、②読み手の立場からの捉え直し、③自己の言葉の在り方の問い直し、の3側面から定義する。

「言葉への自覚」を高めるため、横濱(2023)が既存詩創作実践の課題分析から導いた4つの条件「単元中に詩を書く活動が2回以上設定されている」「創作方法や詩の内容を学習者に委ねている。数種類の創作方法を指導者が提示して選択肢を用意している」「自作の詩について解説する活動が設定されている」「自作の詩を匿名で発表する機会がある」を実践基盤とする。計画的継続的な創作体験、興味関心に応じた主体的な創作方法選択、表現意図や工夫の言語化による新たな視点の獲得、心理的抵抗を減らし内面を表出しやすくする場の設定はいずれも必須と考えたからである。

しかし、環境を整えるだけでは、生徒が必ずしも「言葉への自覚」を高めるとは限らない。本研究では、この基盤に以下の3手立てを統合し、探究的な学びを促して「言葉への自覚」を高めるプロセスを一体的に設計する。

第一に、創作の入口を支援する「教材詩を活用した創作刺激活動」である。中井(2022)は詩創作指導を「遊び心とともに夢中で言葉を『いじくる』時間・探究する時間」とし、言葉を表現素材として多角的に眺め、使ってみる創作刺激活動の重要性を示した。佐藤(2013)は、生徒が作品を模倣して創作する学習を通し「書き手の立場で作品を眺めることで、書き手の意図や書き手の表現の工夫を理解することができる」と実証した。これらに基づき、生徒に各教材詩の魅力と関連付けた多様な創作刺激活動を体験させ、教材詩に着想を得る創作方法を提示する。創作へのハードルを下げ、表現の選択肢を広げることで、生徒の①目的や意図に応じた言葉の選択を促す。

第二に、創作の過程を支援する「探究サイクルの形成」である。Ⅰ教材詩学習→Ⅱ創作と解説→Ⅲ作品共有と助言→Ⅳ振り返りと次への課題設定、を「探究サイクル」と定義し、生徒が螺旋的に学びを深められるよう3回繰り返す。生徒が書き手と読み手の視点を往還し、課題を次作に生かす経験を積むことで、②読み手の立場からの捉え直しを促す。

第三に、創作の出口を支援する「私の言葉アンソロジーの編集」である。生徒が創作詩や価値ある言葉を編集しあとがきを添える場を設ける。自己の言葉をメタ認知し価値を見いだすことで、③自己の言葉の在り方の問い直しを促す。

2 研究の目的

「教材詩を活用した創作刺激活動」「探究サイクルの形成」「私の言葉アンソロジーの編集」の3手立てを統合した詩創作活動が、生徒の探究的な学びを促し、「言葉への自覚」の①目的や意図に応じた言葉の選択、②読み手の立場からの捉え直し、③自己の言葉の在り方の問い直し、の3側面にどのような影響を与えるかを明らかにする。

*新潟市立内野中学校

3 研究の方法

(1) 研究の対象・使用する教材・期間

対象はN市U中学校第3学年2クラス・計70名。教材は光村図書出版『国語』掲載の詩3編。探究サイクル1は令和7年4月、探究サイクル2は7月、探究サイクル3と私の言葉アンソロジー編集は9月に実施した。

(2) 研究の設計

① 「言葉への自覚」の定義

- ①目的や意図に応じた言葉の選択：伝えたい内容に応じて効果的な語句や表現を考え、吟味・選択すること。
- ②読み手の立場からの捉え直し：読み手への伝わり方を想像したり実際に助言を得たりして、表現を客観視すること。
- ③自己の言葉の在り方の問い直し：自己の言葉を内省して価値を見だし、よりよい言語生活への意欲をもつこと。

② 分析の方法

量的分析では、詩創作や「言葉への自覚」の3側面に対する意識、3手立ての有効性についてのアンケートを4件法で実施し、回答結果を分析した。質的分析では、生徒の「詩の解説」や「振り返りシート」、「私の言葉アンソロジーのあとがき」についてルーブリック（表1）を用いた。

表1 「言葉への自覚」の質的変容を捉えるための分析ルーブリック

水準	①目的や意図に応じた言葉の選択	②読み手の立場からの言葉の捉え直し	③自己の言葉の在り方の問い直し
A 十分満足できる	用いた語句や表現がもたらす効果をふまえて、選んだ目的や意図を説明している。	読み手の立場から客観視し、表現改善の具体的方針を述べている。	単元での自己の言葉の成長や発見について具体的な言語体験を挙げて述べ、今後の言語生活への具体的な方法を示している。
B おおむね満足できる	用いた語句や表現を選んだ目的や意図を説明している。	読み手への伝わり方を意識し、読み手からの助言による気づきを述べている。	言葉についての気づきを述べ、今後の言語生活についての方向性を示している。
C 努力を要する	用いた語句や表現と、目的や意図との関係説明が見られない。	読み手への伝わり方への想像や読み手からの助言による客観視に至っていない。	自己の言葉への内省が表面的で、価値の発見や言語生活への意欲の形成が見られない。

(3) 実践の内容

① 教材詩を活用した創作刺激活動

本手立ては、主に①目的や意図に応じた言葉の選択を促すことをねらいとした。選択の土台となる言葉や表現の素材を豊かにするため重視したのは、単なる詩創作技法の習得ではなく、生徒が自身の生活や体験から詩情を感じ、「自分も詩を書いてみたい」という意欲をもてるようにすることである。創作刺激活動一覧（図1）として、中井が示す5種と澤田（2022）が示す1種に筆者が2種を付け加えた8種を生徒に示した。

長田弘作「世界はうつくしいと」では、日常から美を見出す魅力に着目し、「フリーライティング」と「マッピングテクニク」を全体で実施した。「うつくしい」の言葉から連想する言葉を挙げたり、通学路の出来事を地図上に書き込んだりすることで、生徒の日常の価値に気づかせた。石垣りん作「挨拶-原爆の写真に寄せて」では、視覚的情報から深い思索を生み出し、呼びかけなどを用いて主張する魅力に着目し、「言葉で表そうオノマトペ」と「おしゃべりなモノ」を実施した。生徒が用意した写真や絵から聞こえそうな音を言語化したり、擬人化したモノになりきって思いを語らせたりすることで、視点を変えて世界を見つめ、多様な言葉で表現する経験を積ませた。島崎藤村作「初恋」では、文語七五調のリズムと恋の展開を物語のように描いている魅力に着目し、「ラッキーディップ」を実施した。七五調の唱歌4編を一行ずつ短冊にしたものから無作為に四行を取り、自由に動かして四行詩を創ることで、言葉のリズムや意外な展開を楽しませた。生徒は、各創作刺激活動を自由に選択し組み合わせ、試行錯誤を通して自らの表現方法を探究した。

② 探究サイクルの形成

本手立ては、主に②読み手の立場からの言葉の捉え直しを促すことをねらいとした。重視したのは、自身の意図と読み手の解釈との間に生まれるズレや広がりを感じ、発見した課題を次作へ生かすという探究の過程を、生徒が俯瞰しながら積み重ねられるようにすることである。そのため、I教材詩学習→II創作と解説→III作品共有と助言→IV振り返りと次への課題設定、という探究サイクルを形成し、支援するためにICTを用いて次のツールを作成した。

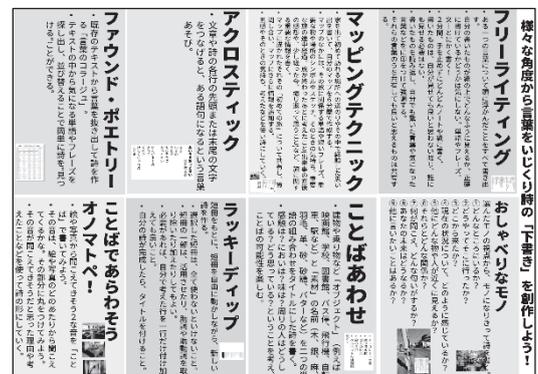


図1 創作刺激活動一覧

探究サイクル3	1	○「初恋」の言葉の響きやリズムを味わって聴き、語彙を豊かにし、語感を磨く。
	2	○「初恋」の文語七五調や展開の仕方等を参考に、詩と解説を書く。 ・七五調の詩の短冊を自由に動かしながら新しい詩を作る。 【創作刺激活動 ラッキーディップ】
	3	・詩と解説を匿名で共有し、印象に残った作品を選んでコメントし合う。 【創作・解説・共有シート】 ・探究サイクル3の学びを振り返り、次作への課題について見直しをもつ。 【振り返りシート】
アンソロジー	1	○創作作品や自己にとって価値ある言葉を編集し、作品にまとめる。 【私の言葉アンソロジーの編集】 ・単元全体を通じた自己の言葉についての発見や成長をあとがきとして執筆する。
	2	・完成したアンソロジーを発表し、言葉に対する思いや今後の展望を交流する。

4 実践の分析と考察

(1) 詩という言語文化の受容と価値の発見

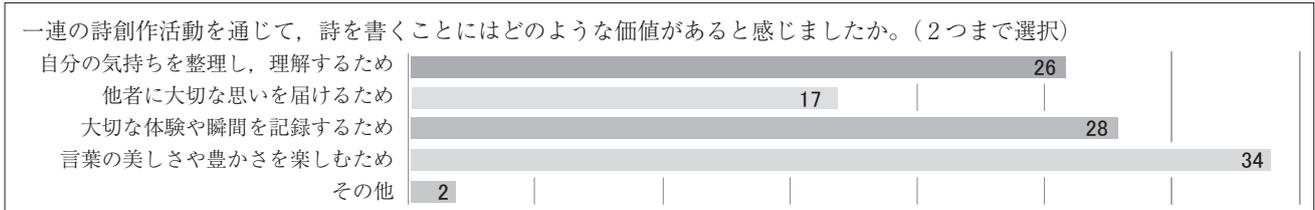


図4 詩創作の価値に対する生徒の意識(複数回答)

詩創作の価値に対する意識調査(図4)では、「言葉の美しさや豊かさを楽しむため」(34人)が最多で、「大切な体験や瞬間を記録するため」(28人)、「自分の気持ちを整理し、理解するため」(26人)が続いた。他者への伝達以上に、言葉や自己と向き合う内面的営みとして生徒が詩創作を捉えたことがわかる。

(2) 「言葉への自覚」の変容と指導の有効性

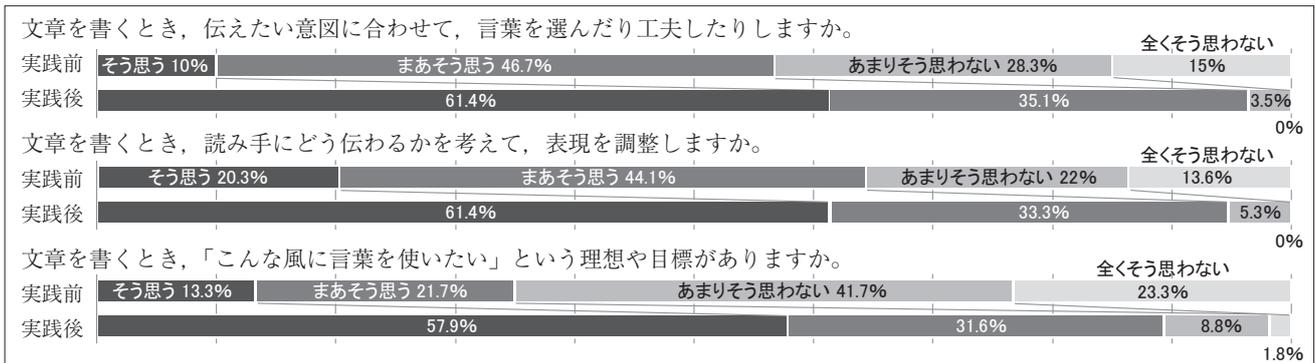


図5 「言葉への自覚」に対する生徒の意識

「言葉への自覚」に対する生徒の意識(図5)は、いずれも肯定率が90%超に向上した。特に当初最も低かった言葉への「理想や目標」の意識は35%→89.5%と最も伸長した。この数値の背景にある変容を、生徒の記述から分析する。

① 目的や意図に応じた言葉の選択

表2 生徒Aの①目的や意図に応じた言葉の選択についての分析

段階	生徒Aの記述 ※下線は筆者	水準と分析
探究サイクル1	解説 動物が好きで、最初は「可愛い」にしていたけれど、「美しい」で全てを表現できると感じて詩を書いた。「～の～は美しい」という形で、動物だけでなく、その良さも表せるよう工夫した。自分たち人間もそれぞれ個性があり良さがあるように、それぞれの動物にも良さがあり、決して批判すべきでないと思いたい。	B水準 語句「美しい」の意図を、動物の良さ「全てを表現」するためと説明するが、効果には触れていない。 「身の回りのもの」から、教材詩の「～の～は美しい」という形式を参考に創作している。
	振り返り 詩を書くことは難しいと思っていたが、今回挑戦してみて、身の回りのもので簡単に詩を書けるから楽しかった。もっと表現を工夫できたらよかった。	
探究サイクル2	解説 まだ三ヶ月の従姉妹の視点から見て、この頃はどんなことを考えていたのかなと不思議に思って詩を書いた。文末に「の」や「よ」を使って小さい子特有の可愛らしさを表現したり、体言止めで「ママ」を使って呼びかけている様子を強く表現したりした。あえて「えんえん」でなく「うええええん」にしたのは、その方が強くミルクを求めている様子を表現できると思ったから。呼びかけを教科書から参考にした。赤ちゃんの尊さを伝えたい。	A水準 語句「うええええん」の効果「えんえん」と比較し、「求めている様子を表現」する意図を説明している。文末表現や体言止めなど複数技法を戦略的に組み合わせている。
	振り返り 何回も繰り返し同じ単語を登場させたり、意味を含める言い回しをしたりして、詩を読んでいるときに少し引っ掛かるような文章にすると、直接伝えるよりも言葉で重さが伝わる。	自身から「三か月の従姉妹」へと視点を変え、教材詩の「呼びかけ」を参考に創作している。

生徒Aは探究サイクル1での「もっと表現を工夫できたらよかった。(振り返り)」という認識を契機として、サイクル2では言葉選択意識がB水準からA水準へと向上した(表2)。表現候補の比較検討と具体的な効果説明はサイクル3でも継続し、感覚的な語彙選択から目的や意図に応じた戦略的な技法選択能力を獲得したことを示している。

他にも、生徒Bはサイクル2で「オノマトペやアクロスティックなどいろんな詩の作り方がわかっておもしろいと思った。(振り返り)」と創作刺激活動による表現選択肢の広がりを実感した。生徒Cはサイクル2で「他の人の中には、教科書中の問いかけや呼びかけ、教詞を効果的に活用している人がいて、とても参考になりました。(振り返り)」と学んだ技法を他者の作品で確認することで、技法の効果を実感したことを示した。

② 読み手の立場からの言葉の捉え直し

表3 生徒Dの②読み手の立場からの言葉の捉え直しについての分析

段階	生徒Dの記述 ※下線は筆者		水準と分析
探究サイクル1	解説	人間は様々なものを作る技術があり、その中には、便利なものや人の命を救えるものだけでなく、人の命を奪ってしまうものがある。	C水準 作品の主題について述べているが、読み手への伝わり方の意識は見られない。 助言から列挙する順序が読み手に与える効果に気づく。
	振り返り	「すごいものを平和なものから危険なもの順番に並べることで、人間の技術が平和にも危険にも活用できると伝わった。」という意見ももらった。自分もこれからいろんな視点から物事を見たいと思った。言葉でも、人間でも、当たり前だと思っているものに対して目を向ければそれのいいところに気付けるかもしれないし、良いところに気づけば関わり方も変わるかもしれない。	
探究サイクル2	解説	ベニスビーチにいたおじいさんが印象に残っているから。サンドバッグを「殴っていた」ではなく、擬音語「ポッコポコ」にしたことで、読み手におじいさんの強さをより伝え、少し印象が柔らかくなるようにした。また最後に語りかけたところは「挨拶」からアイデアを得た。世の中はいろんな人がいるから温かい目で見よう。	B水準 読み手へ「強さ」を「柔らかく」伝える意識をもち語句「ポッコポコ」を選択する。 助言から「喋りかけるような表現」の効果を再認識し、読み手を意識した表現の可能性に気づく。
	振り返り	「最後に喋りかけるような表現を使ったことが面白い」という意見ももらった。表現を少し工夫するだけでより良い詩になると交流を通して気づくことができた。他の人も喋りかけるような表現を使ったり擬音や擬った言い回しをしたりしている人もいて、それだけで印象が変わって面白かった。	
探究サイクル3	解説	音楽の時間にライラックを急に歌い始めた友達が面白かったので書いた。「びっくり」を二回反復し、「大熱唱」と「大爆笑」と「大優勝」の音を揃え、対句にすることで、リズムと安定感を出す工夫をした。読んだときに頭に残りやすいかなと思った。笑わせてくれる友達を大切にしよう。	A水準 読み手の立場から客観視し「頭に残りやすい」よう「リズムと安定感」を工夫する。 助言から「リズム感」の伝わりを評価し、「ものをいろんな角度で見て」と表現改善の具体的方針を述べている。
	振り返り	リズム感がしっかりと読み手に伝わっていることはよかった。ただ、今回のテーマである愛や恋というところから少しずれてしまっていたと思う。自分としては友達に対してのそういう感情がテーマに沿っていると思って書いたけど、実際自分で自分の詩を読んでみて自分の伝えたい思いが感じられないと思った。自分は友達の面白い出来事を正面から見てそのまま詩にしたけど、想いを伝えるにはものをいろんな角度で見て書いたら伝えられると考えた。それが次の改善点。	

生徒Dは探究サイクル1のC水準から段階的に向上し、サイクル3ではA水準に到達した(表3)。振り返りシートによって、各サイクルの学びが途切れることなく次のサイクルへとつながり、累積的に発展していることがわかる。特にサイクル3では書き手と読み手の視点を往還し、読み手の立場での自作評価と改善方針の理論化に至っている。

他にも、生徒Eはサイクル1で「とても長い詩を書いたら、あまりコメントをもらえなかったので、短くても面白い詩を書きたい。(振り返り)」と自身の想定と実際の読み手の反応のズレを認識し、改善意識を形成した。生徒Fはサイクル3で「なるべくわかりやすい言葉を使った。印象付けるために『』を使ったが、使いすぎてもウザいので客観的に分析しながら作った。(振り返り)」と明確な読み手意識を示した。

③ 自己の言葉の在り方の問い直し

表4 生徒Cの③自己の言葉の在り方の問い直しについての分析

段階	生徒Cの記述 ※下線は筆者		水準と分析
私の言葉アンソロジー1	あとがき	言葉は、そもそも自分の気持ちをより近いもので表しているだけで、それ自体には何も意味がありません。ですが、詩の世界や日常生活で、何かを必死に伝えようとする時、その言葉に思いがこもると思います。ただの小細工で言葉を並べるのではなく、その言葉が一番心に刺さるからこそ使いたいという思いをもち、自分にとって大切なものは何なのか、言葉を見つめ直すことで、自分のことが見えてくる。言葉にはそんな不思議な力があるのだと思いました。	A水準 「言葉を見つめ直すことで、自分のことが見えてくる」という発見について、「挨拶」での創作で「音」について「どんな音が心に響くか」「どんな意味を自分の中で持っているか」を考えた言語体験を挙げて述べる。 今後の言語生活で言葉選択する際は、複数の視点(好きな理由・持たせる意味・使用目的・自己理解)から自問するという方法を示す。
		考え方が深まった言葉は、「挨拶」を参考に詩を書いたときに使った「音」という言葉です。どんな音が心に響くか、そしてその音はどんな意味を自分の中で持っているかを考えて一つ一つ理解していくことがとても重要なのだなと思いました。 これから言葉を使うときは、単に誰かが使っていたからとか、なんとなくこの言葉が好きだからとかいった理由ではなく、自分はなんでこの言葉が好きなのだろう、この言葉には自分はどういう意味を持たせて、何のためにこの言葉を使うのだろう、その上で自分はどういう人間なのだろうという、言葉を翻訳して探す作業から自分について振り返ることができるようにしたいです。	

生徒Cは、創作詩3編、印象に残った歌詞1編・英語の名言1編を編集し、「言葉は自分と向き合うための鏡」というタイトルをつけ、あとがき(表4)を添えてアンソロジーを完成させた(図6)。創作体験を統合し、言葉の本質から具体的改善策まで内省した言語観を形成したことがわかる。また、生徒Aは詩創作での工夫や悩みを通して、「作詞家や小説家の作品が深く心に刻まれるのは、多くの言葉や表現から最適な表現を選んでいるからだ」と実感し、「言葉は多様な表現ができるからこそ、人に伝えるときは慎重に言葉を選んで使うべきだと考えたし、様々な言葉をもっと学びたいと思った。そうして見つけた自分にとって意味のある言葉を大切なときに使ったり、常に心に留めておいたり、さらに意味あるものにしていきたい。」と言語生活への展望を語った。さらに生徒Dは「詩に限らず普段の日常生活からどのように言葉を用いるかを意識していこうと思う。普段の会話で自分が言いたいことを、どのような言い方をしたら伝わりやすくなるか、間違った解釈をされないためにどうするかなど、言葉の使い方を考えていきたい。」と、詩創作の学びを日常の価値観に結びつけた。



図6 生徒Cによる「私の言葉アンソロジー」

④ 生徒による3手立ての評価

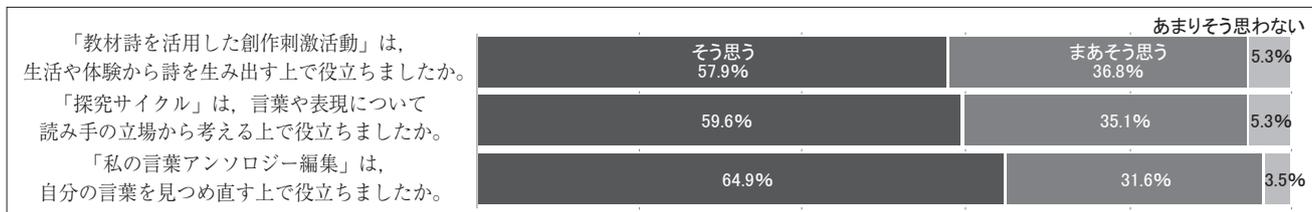


図7 「教材詩を活用した創作刺激活動」「探究サイクルの形成」「私の言葉アンソロジー編集」に対する生徒の実感

3手立てに対する生徒の実感(図7)では、肯定的評価がいずれも94%以上に達した。創作の「入口」「過程」「出口」を貫く本実践の探究プロセス全体が、生徒に有効だと実感されたことを示している。

5 成果と課題

本研究は、「教材詩を活用した創作刺激活動」「探究サイクルの形成」「私の言葉アンソロジーの編集」の3手立てを統合した詩創作活動が、生徒の探究的な学びを促し、「言葉への自覚」の①目的や意図に応じた言葉の選択、②読み手の立場からの捉え直し、③自己の言葉の在り方の問い直し、の3側面を高める上で有効であることを明らかにした。

最も重要な成果は、創作の入口・過程・出口を一体的に支援する探究的な指導の枠組みを示したことである。教材詩を活用した創作刺激活動は、多様な言葉や表現への気づきを促し、生徒の言葉の選択肢を広げた。探究サイクルの形成は、生徒に書き手と読み手の視点を往還させ、言葉を捉え直す力を向上させた。私の言葉アンソロジーの編集は、自己の言葉の在り方を問い直す機会となった。さらに、生成AI時代において、生徒が詩創作を言葉や自己と向き合う内面的な営みとして価値づけた意義は大きい。

しかし本研究は、「言葉への自覚」を高める実践研究の端緒に過ぎない。C水準に留まった生徒への支援方法をはじめ、教材詩と創作刺激活動の最適な組み合わせなど、各手立ての質を高める工夫の蓄積が必要である。今後は、中学校3年間を見通した系統的カリキュラムの開発や、短歌や俳句など詩歌創作全般への応用が期待される。

<引用・参考文献>

佐藤佐敏(2013)「語用論に基づく学習課題ーフィンランドと日本の小学校国語教科書を比較してー」『新潟大学教育学部研究紀要第6巻第1号』

澤田英輔(2022)「動画事前公開とオンラインのワークショップの試みーオンライン環境を活かした公開講座のあり方を模索してー」『全国大学国語教育学会 公開講座ブックレット14 詩を書くことは教えられるのか』pp8-15, 全国大学国語教育学会編

中央教育審議会(2024)「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」

中井悠加(2022)「言葉のティンカリングとことばあそびー詩創作の下書き、共有、評価をどう促すかー」『全国大学国語教育学会 公開講座ブックレット14 詩を書くことは教えられるのか』pp60-73, 全国大学国語教育学会編

文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』

横濱嵩之(2023)「国語科における詩創作活動の内容ー課題を解決するための方策の設定状況の調査ー」『人文化教育研究50』, pp97-114